

15・16世紀地中海世界におけるユダヤ教徒ネットワーク

オスマン朝を中心に

宮武 志郎

従来、ユダヤ教徒社会は極めて閉鎖的であり、各地域に存在したコミュニティー間の関係は疎遠であり孤立したものであるとするのが定説であった。しかし、1492年にスペインにより公布されたユダヤ教徒追放令によって、イベリア半島から多くのユダヤ教徒やマラーノが地中海世界に広がった。それを機に、ナスィー族に代表されるユダヤ教徒およびマラーノのネットワークが成立した。このネットワークが形成された背景として、地中海世界におけるユダヤ教徒コミュニティーの変化とナスィー族の活動との関連について言及する必要がある。

オスマン朝がコンスタンティノープルを陥落させた後、首都としての機能を再生させるために、領内のズィンミーを利用したことは周知の事実である。しかし、ビザンツ帝国に居住していたロマニオート系ユダヤ教徒は、コミュニティーの構成員数の面で他のズィンミーよりも少ない上に、商業に従事していたものは少なかった。そのため、ギリシア正教徒やアルメニア教会派の人々に比して、ロマニオート系ユダヤ教徒の利用価値はオスマン朝にとって極めて限られたものであった。

しかし、1492年以降に、イベリア半島から多くのスファラド系ユダヤ教徒がオスマン朝に移動してくると状況が大きく変化した。当初、イスタンブールのロマニオート系ラビは積極的にセファルディームを受け入れ、彼らをラビの管理下においていた。しかし、次第にセファルディームの数が増大し、ラビの管理能力を超えるようになってしまったため、ロマニオート系ラビに代わってセファルディームの中からコミュニティーを統括できる能力を持った世俗的リーダーが出現するようになった。ここはセファルディームが完全にイスタンブールのユダヤ教徒コミュニティーの主導権を握ったことを意味する。オスマン朝当局もスファラド系の世俗的リーダーをユダヤ教徒コミュニティーの代表と認めていた。そのような状況下でナスィー族がイスタンブールに到着したのである。

ナスィー族はスペインの豪商であるベンヴェニスチ家とポルトガルの名家のナスィー家が結んだ婚姻関係をもとに、リスボンとアントウェルペンを中心に幅広い商業活動に成功していた。しかし、彼らにも異端審問の影が忍び寄ってきた。なぜなら、ナスィー族はキリスト教徒名を名乗るマラーノであったからである。ユダヤ教を隠れて信仰しているとの告発と財産没収を避けるために、アントウェルペンからヴェネツィア、そしてフェッラーラと次々と安全な土地を求めて移住、最終的には1553年ころ、オスマン朝の都イスタンブールに到達した。その際に、ナスィー族はユダヤ教徒の宮廷侍医であるハモン一族を仲介者としてオスマン朝宮廷に働きかけて、移住の安全保証を獲得していた。ナスィー族がオスマン朝に移住する以前に、ユダヤ教徒宮廷侍医を通じてオスマン朝宮廷に影響力を行使した事実は、ナスィー族のユダヤ教徒ネットワークの存在を示すものである。そして、その

後のナスィー族の行ったことで注目すべき活動が二つ存在する。この二つの活動はナスィー族がどの様にネットワークを形成し維持していたかを示すものである。

一番目は、ナスィー族がイスタンブルに移住した3年後の1556年に起こったアンコーナ事件である。アンコーナとはイタリアの教皇領の港町である。この事件は当時の教皇パウルス4世がアンコーナで活動していたマラーノたちを逮捕、異端審問にかけ焚刑に処した事件である。処刑されたマラーノの中には、ナスィー族のエージェントも存在したとされている。この事件に対して、ナスィー族は当初オスマン朝宮廷を動かして自らのエージェントを救おうとしたが、時間的に間に合わず失敗した。そして、この事件の情報が地中海各地のユダヤ教徒やマラーノに伝わると、ナスィー族はアンコーナとの取引を停止するボイコットを提唱した。このボイコットには三つの意義が含まれている。一番目が、一部のユダヤ教徒であるナスィー族が他のユダヤ教徒コミュニティに対してボイコットという経済的制裁を提唱し、影響力を行使したことである。二番目の意義は、アンコーナでの処刑に激化したイスタンブルのユダヤ教徒に対して、ナスィー族がボイコットを提唱することでコミュニティに対する指導的立場を獲得しようとしたことである。三番目の意義は、マラーノであったナスィー族が、ユダヤ教徒と彼らから蔑視されていたマラーノの関係の修復に努めたことである。結果的には、ボイコットはその経済的リスクの大きさのために失敗するが、ナスィー族はイスタンブルでラビに対して影響を行使するほどのコミュニティ内で指導力を持ち、またサロニカでのコミュニティ内でのトラブルにも干渉する程の影響力を持つようになったのである。

ナスィー族の注目すべき二番目の活動は、ティベリアの再建事業である。ティベリアはガリラヤ湖の近くにある町であるが、ナスィー族はオスマン朝宮廷に接近して、その地域での経済活動を通じて利益を追求しようとした。その様子がオスマン朝史料の中に少なからず存在している。それらの史料の中には、ナスィー族がユダヤ教徒の宮廷侍医を媒介として宮廷に働きかけたことが明らかになっている。また、公文書史料の中にナスィー族の当主であった女性のグラツィアの実名まで記されている。オスマン朝で二級臣民の地位に置かれていたズィンミー、それも女性の名前までが記されている事実は、ナスィー族のオスマン朝宮廷における権勢を示唆するものであろう。

さらに、史料に残るナスィー族の商業活動の状況を分析していくと、一族の形成した情報ネットワークの実態が明らかになってくる。このネットワークは、主に次の三つのタイプに分類できよう。①ユダヤ教徒、特にセファルディームの移住によって形成されたもの、②異端審問の強化によって離散したマラーノが形成したもの、③レスポンサに代表されるユダヤ教徒ラビを利用したものである。このネットワークを利用した情報収集能力は、オスマン朝にとっても有益なものであり、ユダヤ教徒宮廷侍医を利用して接近してきたナスィー族を厚遇する一因にもなったのである。一族の当主であるヨセフが、オスマン朝によってナクソスとキクラデス諸島の大公に任命された事実はその証左である。

しかし、ナスィー族に代表されるオスマン朝宮廷のユダヤ教徒社会にも限界性を見いだすことができる。第一に、一族の活動はスルタンとの個人的関係に大きく依拠していた

ために、宮廷内での権力の変化に大きく影響されることを意味していた。第二に、一族が企図したマラーノとユダヤ教徒間の対立の解消に失敗したことである。それは、ナスィー族が没落した後、イスタンブルとヨーロッパ各地に散在するマラーノの情報ネットワークが事実上途絶したことからも窺える。そして最後に、ユダヤ教徒各コミュニティの独立的性格とそこから引き起こされる対立である。イスラーム社会の中でマイノリティーであるユダヤ教徒にとって、情報の共有化を図るべき各コミュニティの断絶は、政治的にも経済的にも計り知れないマイナス面をもたらすものであった。